本 春

Anadaaaaaaaa

B Comments Distributed Comments

少の法式に依て形を造るのである。花には花壇はない。少さな て其 合の 雑なもので、一例を擧ぐれば或種類の えたる石は土佐 する處は、岩石や木や、 池 中 に咲て居る、花片の外側は濃紫色で縁取られて、輝いた橙黄色 角で飾られて居る。茶屋や寺院の庭には躑躅や椿や木蓮や櫻が 間に堤 V) H から大 の花 别 には燕子花や蓮の子があり、 生 る。また楓の若葉が二月の花より美麗 本 30 があるが、これはほんの偶然の事である、 一木の 配置し時代をつけて、尋常見る處のものと同 春の花の為には手入が非常にかいるのである。櫻や木蓮は 赤 躑躅の大藪があり、棕櫚が密生して居る。 は總じ い若芽や愛らしい燕子花は拉芬佗色の花が枝になった蛮 の側を見ると葉の開かない狗脊や蕨があつ 分の遠隔の地 種 儘に置くが、 あ が日 類に附て適不適を考へ、 るのは極僅の時で、其他は綠色や灰色の並列 て氣候が暖いのて、草木 本の一 から取寄せなければならな 、日本で有名な燕子花、牡丹菊等各種類を専門家 方人が日 其他のものは、 であるい 石燈籠や池、 庭の片隅には百合や菊や其他 本の 装 風景園藝 形の配置等を研究して、多 が盛に成長する大竹林 橋等を一定 B 飾 木を植えると、 本の 的 である。 0 庭園は花園 園 師の技術は 土佐とい 四 園藝師の 一藝師の理想に依 の法則 此 様に見せるの た。また蛇 月の最後の 庭園が 其側 へば に準じ 眼 である に据 があ 目 调

> 亭主は普通の贈物と、チャダイの愛取りをくれる。これをやるって、頭を下げて鼻を敷物へ附けて、鳶色の手をついて居る。 五月の と町はづれまで送つてくれるのである。 やへと人力車で出立した。荷物と繪の道具とで人力車が二臺 n ーイとわれとで二臺、 富豪 た。これで牡丹の時節を知つたので、翌朝早くこの名所の 家で告別の辭を述べる。少女等は緣側にづらりと並んで坐 の好事家が培養して居るのである。 日に宿の亭主が牡丹を唐銅の花紙に挿 一輛に二人の挽子で下って來た。タツミ して持て來てく をやる

水"

吟味 う珍らしがつて居た。 吉野 禮 である。 立場茶屋へ休むのて、こくで風俗をも見られ、休息も出來る 氣心騒亂す馬蹄の音に聞えず、 好天氣で道路が可くて挽子が活潑ならば甚だ愉快なもの 子山の麓であるので、森林のよいのもあつた。人力車旅 と向つた。 0) に大分變つて來た。今まで樹木が裸であつたが、今日は旣に春 があつて物珍らしさうにわれか見て、 ならず、 儀 葉をつけて居るのである。 としてあ 川に到る二三哩間は曾ての上りと同じであったが、 斷つ 行手の景色の佳ので心を奪ばれてしまう。 1 稍々下りで道は住 サで辨當を食ふたときは、 る、 わが年齢、家族其他人事に闘することを聞 を宿 時 U) 計 亭主にまで見せた。 マッチ箱、 ムダの渡船を越してから北い方 し、ヤマトからトサへ下るトノミ 草鞋 の足音は極 卷煙草入、 宿に愛くるし われとわが所持品を大さ そ かす 其他 n それで折 かで耳さ から ものを 九日 日 行も、 觸に 間

n たには甚だ迷惑した。

帝の墳墓のツムリ t ・マトの 平 原は日 (培塿) 本現人種の が澤山 最も 早 い歴史的 の古跡で、 歷代皇

鴈 やうに山 輪 0) を逍遙して、 宿 くとも十二人は寢て居つた。 B とい 1-市中 10 石燈籠を背景にして午後 を得たのは僥倖であったのである。 しては利益なしで遇するとい るので、 ジンムテンノーを初として て居る。 題の セは此人々で群集して、 0 廊 兩側には牡丹が植って居る、 をとつて 塞つて居る。わが宿 巡禮者が澤山 白 ふて 繪や があって、 から濃紫と並 地とせられて居 こしは祖先崇拜の 唐銅 寺は丁度奈良の二月堂 、居る。 側に建つて居る、 から独時間があるので、 0 燈 あって、 香爐が据えてあり、 セ寺へと上つた。 旅宿もこの 籠 んで、 る。 つた が + あり の日 隣室には少 茶屋は何 巡 日 其他多くあ 多くば皆廣 古い灰色の 年々此地方 7 マトメグ 光に輝 わが 內部 ふ事 禮 本人には 其他 花は大 潜に對 石段 0) 1) 0 禮 街 室 n 0)

> かにも静穏な慈悲深い表情があつれた三十尺もあらうといふ黄金色の い表情があつた。これ 觀 音の 立 も窓の 像 があ ない。 る。 其 顏 -

暗

い燈で見えたのであ

0

た。

此

等の

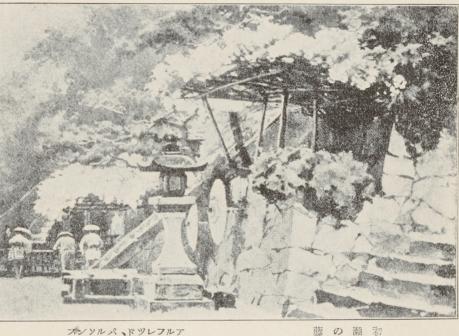
後 薄

から

凡

居る。 魚や 時も には かつ を搗 杓で湯や使水に酌んで居るのである。 中 な池があって神聖な龜が居る。 兩 11 側 (1) せ け 1 0) 野菜を洗 女が裾を端折つて衣類を洗つたり、 0) 小さな寺の僧坊等がありまた 溝では て其 通りには溝 最 は家事用に使用して居る。 また他 最も未開 一端 米搗の C か の地 の所では が掘ってあっ また長い木の 蹈 小水車 んて では杵と臼とて米 長 搗くの いれに を廻ば て、 柄の檜 小 8 樞 眞 20 何

て、 にはしやかや一八が繁つて居る。 見えて、 小 二 て流れる。 ヤマ 流 0) JII 地で 本流で から川を見下す處は風景 0 川の 水が輝 堤には竹が生か 兩側は緑の あ セ の人家の 3 60 谷川は て居 30 小山で 灰色の 家の ぶちり 絲 後に 灣 屋 が 0) 絕佳 處 曲 添 根 7 及 々 0 から



る。

所 がある。祭壇の入口を通り越すと濃紫の幕が懸つてあって、

1=

小村落が點在し

て、

遠くヤマト平原に連なつて居る。

平

原に

拜

先には山々が雲の如く連つて居るのである。 はジンムテンノーの陵のあるウネビヤマが中央にあつて、その

や蕨折りの女や小供である。日本では蕨を葉の開かない内に折 事を怠けて、終日わが肩の方から覗込んだり、 廻りにたかられる憂がない。稀に人が見ゆれば、それは薪採り ふて流れる清流があつて、 うで、其下には若楓がある。最もわが意を得た處は、綠草を縫 紫の花束を垂下げて、宛ら樫と杉の老木から瀧が流れて居るや 顔を見たりして居たからである。これが五月の九日で、 つて茄で、醬油で煮で食するのである。 いて居る。こしばまた閑寂 を去ったのを喜んだであらう、わが來るときは寺の 朝まだきまたも人力車で舊知奈良へと戻った。 一の藤の花が今を盛りと咲いて居るのを發見した。 兩側にある木は皆藤で、花が盛に咲 の地で巡禮者や旅人の跡がないの 口を開いてわが 觀音は 藤の花は薄 僧侶等は仕 わが カスガ ハセ 公

瀧

える。 奈良で仕事をすれば澤山ありながらも、 つた。 を準備して明朝出發する筈にした。 あると聞 方が良策であるので、また宿でも、 たころは、藤花は既に散つてしまつた。それに寫生地を更へた 々に居つ あるまいかと、寺院や公園を廻つて見て、 Ш 頂上には平らな芝地で、天氣が好いので遊山に來た人 々に草が一面にあつて風馴れの いたので、そこへ行かうとしたのである。 1:0 頂 上からは、 キッガワに沿ふて奈良 もしやまた寫生 ビハ湖畔のヒコネに古園 こくを出立しやうとし しない松の木があり、 ミカサヤマへ上 荷物 し残した處 一帯が や何 見

が、

脚

1= 難くて、また二三日を延ばしたが、怠勝ちの爲めに好題 谷 上らなかったのは恨みであった。 間は躑躅 が燃ゆるやうな花を附けて居る。 遂にこの 此 項完 目も書 景 色の

捨

石神 井

水の面 茂き中より 杉の影の暗く映したる上に浮草の葉のところく、漾える、 北の方を見ると、 と下ると辨天島で、中に小さな堂がある。 井川となり、練馬を過ぎ板橋を過ぎ王子を過ぎ春は に大なる他がある。シャクジ井ノイケと呼ばれて、紅葉に名高 く静に舞ひ下るのもある。更に岸を傳ひて杉林の方へゆき見 小丘は稍大なる松の並木が風情を添えてゐる。 るのである。氷川神社の鳥居の前を左に、 枯葉もみぢ葉を泛べて、終には豊島村のほとりにて隅田川に入 まれて流さるし紫雲英蒲公英、秋は風に誘はれて自ら散りゆ 甲武鐵道荻窪停車場で降りて北の方約 恰も他の景色に對する感がある。 を据えて見給 東南高き丘にある氷川の森は屹として一段の威嚴を添 川の水源で溢れて流るし清き水は、初めは幅 代り や蹴りて走れる、 水禽の鳴音連りに、 静かで邪魔するものもないから、 周圍十町程の池の對岸は重黑な杉林で、 あるはまた五羽六羽高く飛びて間 時には羽摶きにつれて一 此地は往くに稍 里 少しゆきてダラー 朽ちたる橋を渡って 志ある人は 下 水は深く清く、 石 一間 不便では 前申 里の 井 程の 村 羽三羽 童に摘 一度三 とい ある 東の もな 石